P2-014

乳児院における里親交流前後の発達変化

加藤 優子

東京都済生会中央病院　附属乳児院

【背景】
養育困難な「要保護児童」について、欧米では7～80％が里親家庭、日本では9割近くが施設措置である（国連から日本政府に対し、家庭的な環境で児へのケアをするよう勧告あり）。2014年3月に厚生労働省の出した「社会的養護の現状について（参考資料）」では「施設の小規模化と家庭的養護の推進」を打ち出している。
特に乳児院入所では、入所前の家庭環境や入所理由による発達的影響と、発達初期からの母子分離経験や余儀なくされる集団生活による発達的影響があると考えられる。当院でも、近年里親委託事例が増え、その発達変化から家庭養護の大切さが臨床的に感じられる。
【目的】
社会的養護としての施設入所の必要性と重要性も受け入れつつ、里親委託事例における交流前後の発達変化に着目し、乳幼児期の家庭的養護の意義について改めて検討したい。
【方法】
対象は、2011年4月～2015年12月に委託が完了し、交流前後に発達アセスメントをした児。それ以外の入所児とその発達変化を比較する。
【結果】
通常の発達はAのような特徴があり、その傾向と里親交流前後の発達を比較すると、Bのような傾向があった。
A:通常の発達の特徴
1）0歳3ヶ月までは、力強い泣きや抱っこ時のアイコンタクトでしっかり大人を求める等、言語・社会面の高い児が多い。
2）0歳9ヶ月頃までには、腹這いの頭上げ、ずり這い、つかまり立ち等が早く、姿勢・運動面の伸びが大きい児が多い。
3）1歳3ヶ月頃は、歩行完成と摂食のある程度の自立により部屋の移行があり、その急な環境変化により、情緒面が大きく動かされる。情緒安定が第一の課題となり、この時期、認知・適応面は一時停滞する。
4）2歳頃になると、自分の居場所が確立し、認知・適応面、その後言語・社会面の伸びが見られる。
B:里親交流前後の発達の特徴
1）発達指数が伸びる。また下降傾向、停滞期も、下降が止まったり逆に伸びたりする。
2）伸びの領域は児によって違う。
【考察】
里親交流では、より良い関係性の構築に細心の注意が払われ、その交流時の構成メンバー、交流時間、交流場所、交流頻度等が決められる。望ましい関係性が構築され、自分だけを見てくれる人の存在により、情緒的安心が確保されると考えられる。そのことが、発達に大きく影響を与えたと考えられる。
【まとめ】
発達初期の母子分離と集団生活を余儀なくされる乳児院の子どもたちは、心身の発達経過からも、家庭養育を希求している。

Presented by Medical*Online